
sora

碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s o r a

【Nコード】

N1978B

【作者名】

碧

【あらすじ】

空が好き。この青い空が……。：：けど、なぜこんなにも好きなんだろう。そんなこと考えもしなかった。

第一話 空

今日もまた、上を向いたら青い空が広がっていた。

*

*

僕が今日もこんなに美しい青空を見れるのは、あの日があったからなのかも知れない。

*

*

「ねえ、」

振り返るときれいな黒髪の少女が可愛らしいワンピースを着て立っていた。

「どうしてずっと上向いてるの？」

僕は目の前にいる少女の美しさに自分が頬を赤らめている事に気づいた。

僕は考えもしなかった。なぜ自分が空を見ているのか。それは・

「僕にもわからないんだ。君にこの謎を解いてもらおうかな？」「僕は笑いを含めながら言った。別に、本気で言ったわけじゃないんだよ。ただ、君を見てるとじょうだんが言いたくなっただけなんだ。

「じゃあ、行こう。」

「えっ」

今、僕は名前も知らない少女に手をひかれ、走っている。

どこへ行くのだろう。気になるけど、聞かない。なんだか、この少女についていくと心地が良かった。

「あつ」

急に少女は止まった。僕は急に止まった勢いで少女にぶつかった。少女から桜のようなかなすかな花の香りが僕の鼻をつついた。

「リンに名前言ってなかったよね。」

たしかに聞いてない。だけど、僕も君に名前を教えていない。

「なんで僕の名前知ってるの・・・かな？」

「知ってるからだよ。」

そんな笑顔で言われても、答えになってないし。どう考えても答えになってないって。

「私の名前は、ルイ・ミカ・マクダウエル。なんとも呼んで。あと、さつきから年下みたいに扱ってるけど、あんたより八歳年上の二十五歳なんだからね。…ま、いいけど。」

”ルイ・ミカ・マクダウエル”きれいな名前だ。それにしても、年上だとは。明らかに見た目は僕より三歳は年下だ。

そんなことを考えているうちに、空はすっかり赤く染まっていた。どれだけ走ったのだろう。ここはどこなのだろう。無我夢中にルイについて走っていたのだろう、思い返してもどこを走ったのか思い出せない。

「さあ、もうすぐだよ。」

「もうすぐ?」

太陽がビルとビルの上に沈んでいく。

ちょうど太陽が見えなくなった時、ルイは口笛を短く鳴らした。すると、沈んだ太陽の方から黒いかげがたくさん近づいてくる。

どんどん、どんどん、近づいてくる。

よく見ると大量の鳥。

「何あれ…」

「鳥だよ。」

僕が聞きたいのはそんな答えじゃないって。

「あれに乗るよ。」

「え?!」

*

君は、乗った。それが君の終わりであり、始まりでもあった。
彼女についていくことが果たして正しかったのか、そうでなかったのかは、私にもわからない。

*

第二話 道

「風って気持ちいいでしょ。」

空を飛んでる鳥は小さく見えていたけど、僕たちの周りを飛んでいる鳥はとても大きく迫力がある。そして、僕たちが乗ってる鳥は大きいどころじゃない。人が二人のっっているんだよ。想像できるかい、僕とルイはそれに乗って飛んでいる。鳥の群れとともに。

「うん。上空の空気はこんなに凜と澄んでるんだ。」

本当に澄んでいた。地上は排気ガスや人で息苦しいほどの空気で、風も生ぬるかった。

「飛ばすよ！」

ルイは鳥にぎゅつとつか身を低くした。

僕も風に身を飛ばされないように必死にルイの腰をつかんだ。

「ねえ、どこに向かっているんだい？」

ルイは微笑みながら。

「着けば、わかるよ。」

だから、それじゃ答えになってないよ…。

びゅーんと耳の横を通り過ぎる風がきりりと冷たい。ああ、なぜ僕はこんなところにいるんだ。とても不思議なことだけど、夢だとは思えない。

「もうすぐだよ。」

僕はなぜだかどきどきした。期待？いや、不安だろう。もう、何が起こるかわからない。

そんなことを考えていると急に、鳥たちが下降し始めた。キレイにみんなそろって降りていく。そして、僕たちが乗っている大きな鳥も後を追いかける。

これまたびゅーんと。さっきよりももっと風を強く受ける。きーんとカキ氷を食べたときみたいに、冷たい空気が僕のまわりを駆け

巡る。

「しつかりつかまって。」

僕は言われたとおり、ルイの腰にしつかりとつかまった。つかまったとたん、陸に着地。ふわっと体が浮いた気がした。

「どうだった？初のフライトは。」

ルイは大きな鳥をなでながら、僕に問いかけた。

「冷たかったよ。」

ルイはくすつと笑った。

そして、僕はあたりを見回した。近くに小さな小屋がぽつんとひとつ、あるだけだった。

「ここは？」

やっぱり、着いてもわからなかった。

「君のこれからお世話になるおじさんのおうちだよ。さあ、寒いなら入ろう。」

いやいや、誰だよ。お世話になるおじさんって。やっぱり謎だらけだ。

僕は、とりあえずルイについていった。

コンコン

「やあ、よくきたね。さあ入りなさい。」

*

*

君はまたもや、新しい道へ進んでいった。

それは、神様が導いてくれた道でもなく、ルイがひいてくれた道でもない。まぎれもなく、君自身が切り開いた道なのだ。

第三話 鏡

「さあ、お入り。」

出てきたのは、初老の白いひげを少しあごに生やした普通のおじさんだった。(おじさんというよりおじいさんだけど。)

「おじゃまします。」

小さな小屋の中はやはり狭く、その狭い中にぎゅうぎゅうに暖炉やテーブル、ロッキングチェア、キッチンなどが詰めてあった。そして、暖炉があるせいか、とてもぬくもりを感じた。

ルイは小さな机の前にあるソファに座った。僕も、ルイにつられ、隣に座った。

「その子が、リンか。」

初老の男性は、暖炉の前でルイに真剣な顔をして聞いた。

「そうだよ。どう思う？ダン。」

ルイが初老の男性にそう聞くと、うん…とうなった。

「そうじゃ、リン。君にはまだわしの名前を言つたらんな。」

急にふられた僕は少しひるんだが、軽くうなずいた。

そついや、またこの人にも名前を知られている。僕は心の中でため息をついた。

「わしは、ダン・クラーク・キング。近くの教会で牧師をしておる。君の話はルイから聞いた。」

僕はルイのほうを見た。ルイはすぐ僕の視線に気づき、にこっと笑みをくれた。

なぜ、ルイは僕のことを以前から知っていて、ダンに話しているんだ。

なぜ…なぜ…

「君は、空が好きなんだね。目がきれいな空色になっておる。」

僕の目は、純粹な茶色だ。空色なんていう青は少しも入っていない

い。

「見えるの。ダンには、その人の“色”が。」

「色？」

ルイとダンは目を合らし、アイコンタクトをした。

そのとき、暖炉からボンッと小さな爆発音が聞こえた。

「おっ…ジャストタイミング！」

暖炉の中に、羊皮紙で包まれた小包が現れていた。

ダンは小包を手にとると、そっとひもを解きそれを開けた。中には手鏡のようなものがあつた。

「何ですか？それ。」

リンがダンに近づき、その手鏡のようなものを手にとつた。

「ほら。」

僕の目の前に、パンツと持ってきた。

すると、目に映つたのは空の背景に深いコバルトブルーの服を着た僕だった。そして、瞳が空色をしていた。

僕は、後ろを見た。鏡に映っていた空はない。

体を見た。僕が着ている服は黒の服にGパンだ。

「どつという事？」

もう一度鏡を見た。

「だから、それはダンがもっている力と同じ、“色”を視れるんだよ。色つていうのは、その人の個性や能力、才能によって変わるの。

私は鳥を操れる能力を持つ。色は黒。」

「わしは赤。火を操れる。」

僕は、信じれなかった。ルイは確かに鳥を操っていた。だけど、そんなの聞いたことない。

「信じられないようじゃな。さあ見てごらん。」

ダンは、そういうとパチンと指を鳴らした。

すると、人差し指から小さな火が浮き上がった。

「僕の能力は何なの？」

とても気になって、興奮してしまった。

「それは…。」

ダンには意味ありげな笑みを浮かべた。
「何なんですか？ダンにはわかるんですか？」

*

*

そのころ、空から雪がふっていた。
朝には、積っているだろう。

旅立ちには、痛いほど冷たい冬の風が出迎えてくれるのだろう。

第四話 雪

「ねえ、ダンってば!!」

僕は、少し興奮していた。

「…それは、わしにもわからない。だから、自分で見つけなさい。明日からルイと一緒に旅に出なさい。君は、そうするべきなんだ。私たちも、自分の能力を自分で見つけてきた。」

僕は、何も言わなかった。いや、言えなかった。

「あの、一つ聞いていいですか？」

「何じゃ？」

僕は、とっさに思いついた質問をした。

「その“色”っていうのはみんな持っているんですか？」

名前のある“色”は限られている。個性なのに六十五億ウン千万人すべて違う“色”を持つのは可能なのか、と僕は思った。

「…百三十五色しかない。君は、世界の中で百三十五人しかない“色”の持ち主なんだ。君のような“コバルトブルー”という色をもっているのは、世界でたった一人。君だけだ。」

僕だけ。そして、僕が持っている能力は誰も知らない。

「で、明日から二人には旅立ってもらおう。ここに長居されても困るんでな。」

ダンがしゃべり終わった途端、また前のように暖炉から小さな爆発音が聞こえた。

煙がもくもくと立った後、暖炉の中にはバツクパツクくらいの大きな包みがあった。

「おうおう。上等モンじゃ。」

ダンは包みを乱暴にバリバリと破いた。

「何ですか？それ。」

それには大きなかばんがつつまれていたようだ。

「リン、君の旅の持ち物だ。」

そうか、僕は旅をして自分の能力を探さなければならぬ。

「どんなものが入ってるんですか？」

僕は気になり、ダンが座っているロッキングチェアに近寄った。中をのぞきこむと、たくさんのもが入っていた。

「君が生きるために必要なものがたくさん入っている。旅中にゆつくり見なさい。使えそうなものをたくさんいれておいたから安心せえ。」

僕は、なんだか急に寒くなった気がした。

「あつ雪だ。」

ルイが言った。

窓の外を見ると、こんこんと真つ白な雪が降っていた。周りに光がない外はとて黒かった。空には無数の星が輝いている。今日は、大きな満月だ。その月の隣で青白く光っている星は、ニューズで新生物がいると騒がれていた星だとわかった。

僕は、やはり外を見れば空を見ってしまう。

「そろそろ寝たらどうじゃ。寝袋はそこにおいてあるから自由に使え。明日は朝一番に出てもらおうぞ。」

僕は、時計を見た。

もう十二時を過ぎていた。

「はい。」

*

*

君は、寝袋に入るとすぐ眠りについた。

雪はどんどん積もっていく。

静かに、静かに、闇の中へ解けていくように。

君は、明日から“自分”を探しに行く。
手探りの旅が始まる。

*

*

第五話 朝

「リン、起きて。」

まだ、窓の外は薄暗かった。しかも朝は、夜以上に寒かった。

ルイは寒そうに凍えながら、僕をゆすった。

「うん……。」

僕は、昨日の出来事が夢じゃなかったんだと実感した。

「さあ、これに着替えて。」

ルイは、僕にゲームの世界のような青い戦闘服を差し出した。

僕は渡されたその服をまじまじと見た。その服は、本当にアニメや、ゲームの世界に登場するような少し飾りっ気のある服だった。

じっくり広げてみた後、僕は部屋の隅へ行き、着替えた。

「とても似合うじゃない。」

僕は、自分の頬が少し赤くなったのを感じた。

そして、ダンが大きな鏡を部屋の物置から取り出してきた。

「どうじゃ、着心地は」

僕は、少し照れながら、

「とても丈夫な生地で暖かいです。」

鏡の前で、僕はくるりと回ってみせた。

そのとき、僕はふと思った。

ああ、なぜ僕はこんなことをしているんだろう。なぜ、こんなところにいるんだろう。

僕の頭の中にそういう疑問ばかり浮かんだ。

「どうしたの？浮かない顔してるよ。」

僕は、ルイにそう言われてはっとした。

「……いや、なんでもない。」

「そう。」

ルイはそう返事をしたが、僕をちらりちらりと見てきた。心配してくれてるのだと感じた。

そうして、準備をすすめていった。

「支度はできたかい？」

ダンがキッチンから朝食を運びながら、尋ねてきた。

「さあ、早く出発しないと日が昇ってしまうぞ。」

窓を覗いた。朝日は向こうのほうにあっただが、霧に遮断されていた。その霧は、うつすらと空気に膜ができたみたいだった。何か、入っていくと二度と戻れなくなるような雰囲気をかもし出していた。「何ポーっとしてんの？早く食べて出発するわよ。」

ダンが作ってくれたほかほかの目玉焼きトーストとミルクティーは僕のおなかをやさしく満たしてくれた。

「早く！！」

ルイは僕がミルクティーを飲み干す前に食べ終わり、既にドアのところで待っていた。僕は、ルイにせかされ飲んだミルクティーにむせながら急いで荷物を持ち、走った。

「ではな、君が立派になって戻ってくるのを楽しみにしているよ。」
そして、ダンは僕にハグをし、見送った。

「じゃあ、またいつか会う日まで！」

そっぴい残し、僕らはドアを開けた。

ルイは、ダンに何もいわず出た。

外は予想以上に寒かった。しかし、今日もらった服が僕の体温を逃がさなかった。

「これから、どこに行くの？」

ダンの家から数分歩くと雑木林が現れた。ルイはその中の道なき道をどんだん足を速めた。

「空。」

ルイはポツリと言った。

「空？」

ルイはコクリとうなずき、立ち止まった。

「空の国。エルチエ・レ・シエロ共和国」

聞いたことのない国だった。

「飛ぶよ。」

ルイがそういった途端、大きな黒い影が空の向こうから近づいてきた。

*

*

君は、旅たった。

“自分”を探すために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1978b/>

sora

2010年10月10日19時30分発行